2004 MARCH Vol.18

COM+S

COMMON COMMUNICATION COMPANION

コムズ

情報発信「コムズ」松山市男女共同参画推進財団

コムズフェスティバル特集

～地域を創る女たち、男たち～

リポート
●子育てほっと楽　同窓会　7
●コムズde遊ぼう　7
日本女性会議2004まつやま Vol.4　8

COMMON（共通の）、COMMUNICATION（共にする）、COMPANION（仲間）の接頭語「COM-（コム）」は“共に”という意味です。これを複数形にすることにより、男女を問わず多数の人が集う場所を表現しています。「＋S」は男女みんな（複数）の平等と、プラス思考、プラスαなど、知り学び、創造し、伝えていく、前向きな姿勢を表現しています。

コムズフェスティバル大特集

～地域を創る女たち、男たち～ 2/7sat.▶2/8sun.

愛媛大学の学生さんによる美しいバイオリン演奏で開会したコムズフェスティバル。「日本女性会議2004まつやま」へのあゆみの上映や、当財団理事長でもある中村時広市長のあいさつからも、いよいよ近づいてきた松山での女性会議開催に向け、実行委員全員の意気込みを感じることができました。

コムズとコミセンの2ヶ所で盛大に開催されたこのフェスティバルの様子を、コムズリポーターの3人がご紹介します。

開会あいさつ　松山市長　中村時広

人にはさまざまな差別の歴史があり、そのうちのひとつである性差の問題は歴史や文化に根ざしたものであり、それを解消するために命がけで行動してきた人々の努力があった。価値観に関わる問題を転換することは並大抵のことではなく、さらに情報化社会の中で人々の考え方も非常に多様化してきている。幅広い方々に粘り強く呼びかけていくということなくして、活動が定着するということはないわけである。そのような中で、秋に松山市で開催される日本女性会議では、さまざまな意見の人がいることをどう伝えていくか、どう話し合いの場所に出てもらうかということが成功の鍵であろう。この日本女性会議には、普段関心のない方々にどこまで参加していただくかということを行政も考えていきたい。どのような運動にも言えることだが、政治的に中立であるということも大切である。男女共同参画の道筋の先駆者として、皆さんにも活動を続けていただきたいと思う。

日本女性会議に向けて、松山の地から根強い運動の飛躍の年になることを心より願っている。

コムズフェスティバル　記念講演

「女と男（ひと　ひと）　ともに輝け21」

～私がわたしらしく生きる～

講師：辛（しん）　淑玉（すご）さん

（株）香科舎（コウガシャ）代表　人材育成技術研究所長

人材育成コンサルタント

現在、企業・自治体・教育機関・各種団体からの依頼を受け、人材教育や人権に関わる研修・講演を年間百本以上受け持つ辛淑玉さんの記念講演が2月7日（土）に開催されました。会場の人々を惹きつけるパワフルで魅力あふれる辛さんのお話を、コムズリポーター田中がご紹介します。

なぜ私がいろいろな形で企業内研修に呼ばれるかというと、経営者として結果を出してきたからです。私が請け負った1989年の九州万博における募集・採用・教育・運営がどうだったか。これは日本の従来の記録を全部塗り替え、おそらく今でも抜かれていません。パビリオンへの入場者数、マスコミ登場回数、お金をかけないでやったイベント数など。その実例を紹介します。

万博のコンパニオンには、身長・年齢・学歴・語学力などさまざまな条件があります。コンパニオンは企業の顔で、その研修は1年前から始まります。私のところに話がきたのが1988年の夏で、他のパビリオンでは人材がすでに決まっている状態で、開催まで本当に時間がありませんでした。「人なし・金なし・時間なし・九州では無名・経験者なし」と、とても大変でした。人手不足の時代に60人のコンパニオンなんてとても集められません。そこでどういう告知をしたかといいますと、年齢制限なし、学歴不問、身長不問、未婚・既婚不問、そして性別も不問にしました。コンパニオンが女性である必要はないわけですから。すると30人の募集に対し、なんと600件もの問合せがありました。下は18歳から上は72歳までという幅広い層からの応募がありました。枠を取り払った瞬間に多くの人からのアクセスがあったのです。今までのコンパニオンの枠を超え、一緒にモノを作っていくんだという思いから、やらなければいけない仕事をすべて情報として提供しました。採用の基準は、失敗してもいいから「やるかやらないか」だけにしまし

た。男性審査員と私たちの採用基準には大きな差があり、男性審査員は自分の好みと外見優先で選ぶ傾向がありました。それは、女性に期待することとして見た目に重きを置いていたからです。私たちは外見に関係なく、とにかく意欲的な人を採用しました。マーケットを考えたとき、いかに人を大切にし、いかにさまざまな人の能力を引き出さなければ勝ち残れないかということを私は現場ではよくわかっていましたから。単色な頭で考えていたのでは競争の中で勝てないわけですよ。多様なスタッフがいるので、ユニフォームも冬は暖かく、夏は涼しく、とにかく機能的なものを依頼しました。一般的にコンパニオンの研修では、にっこり笑って足の角度は何度というような挨拶の練習から始めます。しかし私がスタッフに一番最初に教えたのは、大きな枠の中から伝えていくという観点から、日本とアジアとの関係です。チームを作ってアジアについて何でもいいから調べてきてもらいました。するとさまざまな視点からおもしろいものがたくさん出てきました。他には、お客様と対面するのではなく、一緒に考えたり楽しんだりしながら作っていこうということを伝えました。お客様が見ている方向と同じ方向を見て、いつもお客様の側にいてお客様の話を聞くということです。プレイベントの際、通常はプレゼントを渡さないと人は入って来ないのですが、さまざまな知恵を使い、何とかパビリオンに来てもらうようにしました。待っているお客さんたちと話をしたり、バンブーダンスをしたり、フォークダンスをしたり、お金をかけずに待ち時間も楽しめるということを心がけました。語学勉強はせず、ボードに絵を描いて各国の言葉ではなく日本語で話しかけ、その絵を選んでもらって何をしたいかを理解していました。言語ができないと会話はできないなんてウソですよ。気が付いたら多くの外国人がうちのパビリオンに来ていました。

開会式当日でのことです。会場の中にあるマンホールに針金が出ていて、危ないと思ったのですが、開会式に出席するため走って向かっている最中だったので、私は一瞬頭をよぎったのですが無視しようとしました。しかし彼女たちは違ったのです。彼女たちはすぐさま手で針金をとりました。汗だくになって手は血だらけ、ユニフォームも汚れてしまいました。彼女たちは自分のパビリオンだけではなく、全体をどのように見ていくのかという考え方ができていたのです。結局、開会式の時間には遅刻してしまいましたが、彼女たちって何てかっこいいんだろうと思いました。

ある時､クライアントの会長が来場することになったのですが､彼女たちは会長の顔も知らないわけですよ。当日、会場内には百年に一度くらいしか咲かない竹の花が咲いていて、それは一般の人はなかなか入れず、しかも踏んではいけない芝生の上を踏んで行かなければ見ることができない場所にありました。すると、あるスタッフが会長を見つけて、「中年男性が一人で来たのは何か理由があるのだろう。かわいそうに」と思ったのか、彼女は会長のそばに行き、腕を取り、「おじさん、今日竹の花が咲いたんだよ。本当は踏んではいけない芝だけど踏んでもいいよ、見せてあげる」と言って見せてあげたそうです。彼女とは対照的に関係者の人は硬直していたそうですが。後で私は会長に「私はああいうパビリオンが作りたかった」と言われました。そんなわけで彼女たちのやったことはとても多くの人の共感を得ました。マニュアル通りの研修は一回もやりませんでした。何でもやっていい、どんなことがあっても支えるし、応援すると言った瞬間に、どれほどたくさんの能力が引き出されることか。その結果として、入場者数は２００万人を突破しました。一つのパビリオンに短期間でこれだけ多くの人が入るというのはほとんど不可能な数字です。「あそこは何か違う」ということで、多くの人々が口コミで入ってきました。プレゼントも一切なし。そこにいるのは“人”です。結果として、報道合計数１２４本、入場者数は総入場者数の３割でした。（通常は報道数１０～２０本、入場者数７％程度で合格）さらに、スタッフの離脱者がゼロ。なぜこんなに苦しい中やめなかったのか彼女たちに問うと、「私がやめたら悲しむ友達がいるから」と言いました。自分がいないといけないという人間関係が、

この苦しい仕事をやり遂げさせたのです。

経済構造が変化し、知価価値（知力・知恵の価値）が重要視されるようになり、経済構造が女性を社会に引っ張りあげました。これは一過性のものではなく、これからも延々と続きます。育児介護休業法、男女共同参画社会基本法などの法律は、女性のためだけではなく男性を解放させるためのものでもあります。今まで女性を苦しめてきた構造は男性をも苦しめてきたのです。男性は、どんな時でも強くなければならず、求められたのはお金でした。男の価値はお金でしかなかったのです。男らしさ女らしさとはレッテルで、その人のあるべき本来の姿を奪い取ることです。これを差別といいます。自分らしさとは何か、いつでも自分が選べば、それが自分らしさになります。私らしさは毎日変化します。どんな時でも自分で選ぶことです。一つずつ選んできた結果をふと振り返ってみた時に私らしさが見えてきます｡私たちの社会は劇的に変わってきています。それは多くの先輩たちの血と涙の結晶でもあるのです。踏ん張ってきた女性たちの結果の上に今があるのです。今この会場で私たちが会えていること自体、多くの人たちの涙の上に成り立っています。ここに来ることができた人は、今日ここに来ることができなかった人たちのために何ができるのか考えて行動するべきだと思うのです。

私は女が好きです！どんな時でも図太くたくましく生きていこうとするから。そして、女性があと５ミリでも先に進んだらもっともっと素敵な時代が来ると思うのです。

コムズフェスティバル　記念講演

「女と男（ひとと ひと）　ともに輝け21」

～私がわたしらしく生きる～

SYMPOSIUM

2/8sun.

シンポジウム

2月8日（日）午前10時より、「本音で語ろう！自分らしく生きるために」をテーマにシンポジウムが開催されました。3名のシンポジストそれぞれの経験をもとに、実感し考えた「自分らしさ」について語っていただきました。参加者のみなさんに問いかけると積極的に手が挙がり、会場参加型のシンポジウムとなりました。そのシンポジウムの様子を、リポーター友岡がご紹介します。

■コーディネーター兼シンポジスト／タレント：らくさぶろう
■シンポジスト／ホリスティックヒーリング協会理事長：須賀佳乃
全国農家WEB企画制作者：竹森まりえ

Marie Takemori

竹森まりえ

大阪でフリーライターを10数年間していましたが、その間ストレスからくる過食症を抱えていました。そんな時、ある女性から「生き方って選ぶことができるんだよ。考え方も選ぶことができるんだよ」と言われました。この一言をきっかけに、仕事を辞め、家財道具も売り払い、いろんなものを捨てて違う方向に目を向けたら、新しい人脈や関係などたくさんのものを得ることができました。

2年前から実家のWEBサイトを手がけたのをきっかけに、全国の元気な農家の情報発信となるホームページ作りをしています。何か新しいことを始める時は楽しいのですが、必ず責任が伴うという覚悟を持つことが必要です。また、人は何事に対しても切り抜ける力を持っていると思います。周りのせいにしないで、自分の力を信じて立つことが大切だと思います。

Yoshino Suga

須賀佳乃

10年前の自分は、社会から切り離された子どもとの閉鎖的な生活の中で、自分が自分を生きていないのではないかと強く感じていました。ある時出会った本から、「大事なのは自立であり、自立には経済的・生活的・精神的なものがある」ということを知りました。それから、まず現在の自分を認識し、未来を思い描いて経済的自立を果たしました。次に本当にしたいことをしようと思い、子どもの頃もっていた健康に関する仕事がしたいという夢を思い出し、足裏刺激による健康法を勉強して現在に至っています。また、地域で女性参加が制限されていた行事にも積極的に関わっています。

私たちは気付かないうちに「○○だから」という考えを刷り込まれています。それを一度全部取り払って、自分に向き合うことが必要だと思います。その時に大事なのは、感謝と自己責任です。権利には義務があります。そのことを心で律しながら行動するところに本当の自由があると思います。また、女性の意見も大事だと思ってもらえるよう、女性自身もいろいろな場で発言する勇気が必要だと思います。

Rakusaburou

らくさぶろう

男女平等と発信しているメディアの中でも、男女格差がまだ残っていると感じることがあります。特に組織の中で多いのではないでしょうか。きちんと「おかしい」と言える女性もいて少しずつ変わってきてはいますが。教員をしている友人が多いのですが、夫婦どちらかが仕事を辞める場合は妻であるとか、落語の世界にもなぜ？と感じることがよくあります。

私が一番大事だと思うのは、“好きなことをして生きているか”だと思います。また、常識と言われていることを見直し「それって本当に当たり前なの？」と考えてみることが大切なのではないでしょうか。それが、個人を尊重して自分らしく生きる一歩につながっていくと思います。

会場で「今、自分らしく生きています」と発言できる方がいらっしゃいました。とても素敵なことです。今日のシンポジウムをヒントに、私たちもこれからいろいろな所でそれを発信していきたいと思います。

分科会報告

2/7sat.▶2/8sun.
SECTIONAL MEETING REPORT

今までにないテーマの多さに、「あれもいいな、これもいいな」と迷われた参加者も多かったことと思います。各分科会とも、参加されたみなさんより様々な意見が出され、ともに考えるよい機会になったようです。

紙面上、すべての分科会をご紹介できないのが残念ですが、今回はリポーター田中が2つの分科会を取材してきました。その様子をご覧ください。

まつやまNPOサポートセンター

“あなたらしく”働くことを目指して

コーディネーターの（有）コラボねっと代表取締役：石井布紀子さん、税理士：弘末眞子さん、パソコンインストラクター：仲尾聖子さん、（有）コラボねっと職員：中西頼子さんの経験談から、参加者の皆さんそれぞれが自分らしい生き方について考えました。

【弘末さん】　子どもが望む教育を受けさせてあげるという親の務めを、自分の離婚によって不可能にするのはダメだいう思いから、収入を得るためにまずは働くこと、そして自分もスキルアップできる税理士の資格を取得しようと考えました。女性税理士は全体の10%程ですが、生活者としての感覚を持っているという点では自信がありました。以前は主婦として狭い視野で似たような価値観の中で生活していましたが、働くようになってからはさまざまな価値観を受け入れられるようになりました。この仕事を通じて、子どもの頃からの金銭教育が重要だと実感し、今後は子どもたちへの金銭教育にも力を注いでいきたいと考えています。

【仲尾さん】　職業訓練校でパソコンを勉強後、派遣社員としてパソコンインストラクターをしていました。そして、生徒のフォローが十分にできないなどの不満から、仲間たちとNPO法人を立ち上げようということになり、今まで教えてきた生徒たちにも声をかけ、負けん気とアプローチ力で現在に至っています。事務所を構え利益を第一目的とする気持ちはないので、現在の形は自分のライフスタイルにとてもあっていると思います。

【中西さん】　以前体調をくずした経験や子どもを持つ自分にとって、民間のフルタイムの仕事は不安という思いがあり、子育て情報誌作りなどの市民活動に携わるようになりました。そうすると以前とは異なり、自分を犠牲にせずにやりがいのある仕事を見つけることができました。自分から外に出て行くだけでも、後から参加してくれる人への啓発になると思います。市民活動を10年間続けてきて、“収入を第一に”というよりは“生き方を大事に”した働き方をしていきたいと考えるようになりました。今後も職域を広げていく努力を続けていきたいと思います。

運営推進委員有志の会

「つくってみようよ!“さんかく”料理!」

フェスティバルへの参加が3回目となる今回は、「いつもよりもっと楽しく、体でも動かしてみようか」と提案されたそうです。
“さんかく料理”ってどんな意味があるのでしょうか？

「男女が一緒に何かをする、この意味の“さんかく”が今回のテーマです。今日は料理を通してこの“さんかく”を実践しています。私作る人、僕食べる人ではなく、一緒に作り一緒に食べる楽しみを知ってもらうのが今日のねらいです。それが、基本だと思いますから。そして、今日のメニューを見てください。ちまきや水餃子も形が“さんかく”でしょ。ちょっとかけてみました！（笑）」と、有志の会の田中さん。

餃子は生地から、ちまきは本物のたけのこの皮を使ってと、お客様をもてなす時に「お父さんが作ったのよ」と出せば、ちょっと自慢できる料理が次々にできあがりました。

みんなでワイワイ試食の後には、工水戸先生からの簡単な“さんかく”話もあり、頭の中を動かすことも忘れていません。

今回の参加者数は、男女がちょうど半分ずつでお互い助け合いながら、理想どおりの“さんかく”料理が大成功に終わりました。

松山市新玉児童館

「モンスターズ・インク」上映＆風船プレゼント

モンスターズ・インクの人形が登場！映画を見てサリーの純粋な心に感動し、マイクのような人に好かれる明るい性格になりたいと憧れ、ブーと気持ちをかよわせて過ごした楽しい時間は、胸をほかほかさせてくれました。

「かげえあそび・アニメクラフト」 2/8sun.

映写機の光を使ってかげえ遊びをしたよ。画用紙をちょきちょき、さ～てなにができるのかなぁ。はさみの魔法でちょちょいのちょい。あっという間に、うさぎさん。たくさんいろんなものを作って映してみたね。

まつやま国際交流センター

「ワールドクッキングショー」 2/8sun.

松山に住んでいる外国人の方々によるクッキングショー。

今回のメニューは「ポーランド風ジャガイモパンケーキ」「ネパールのチキンカレーとチャイ」の2品でした。ショーの後には、みんなで料理を試食。ポーランドやネパールのお話も聞かせてもらいました。

まつやまファミリー・サポート・センター

日頃の活動の様子を、アドバイザー手作りのパネルで紹介しました。ファミリー・サポート・センターでは、会員を随時募集しています。分からないことは何でもお尋ねください。

アドバイザー一同、手を振ってみなさんをお待ちしています！

●パネルは引き続き1階ホールに展示しています。
（3月26日～4月16日は、松山市役所本館1階ロビーに展示しています）

2/7sat.▶2/8sun.

コムズかるた 表彰式

平成13年度から募集を始めた「コムズかるた」が五十音揃いました。

今年は、応募総数160点の中から入選作品30点が発表され、当日22名の入賞者が表彰式に参加し、表彰状と記念品を館長から受け取りました。

コムズ大賞

「けんけんぱっ　ジェンダーなんか　とびこえろ」　双葉小・3年　井上　智義

優秀賞

「組体操　女子も男子も　支え合い」	さくら小・6年　田中　里奈
「くんとちゃん　分ける言い方　見直したい」	道後小・6年　上田会理佳
「結婚しても　仕事を続ける　母が好き」	椿　小・5年　山野内愛美
「服の色　好きな色が　自分色」	さくら小・6年　祖母井　愛
「ふやそうよ　男女いっしょに　できること」	高浜小・5年　水口　由貴
「友情に　男女の区別　いらないよ」	湯山小・3年　稲田美紗子
「ゆっくりと　休んで母さん　ぼくがやるから」	三津浜小・5年　能勢　浩大
「ロケットも　男女夢乗せ　宇宙（そら）へとぶ」	みどり小・6年　村上　真貴
「ヲ(ウォ)ッチング　見守る目と目で　男女なかよく」	さくら小・4年　山田　祥子

他入選作品が20点あります。

●このカルタは、4月より学習資料として貸出をする予定です。

Hot Luck Room

子育てほっと楽　同窓会

子育て中の保護者の方が“ほっと楽になれたら…”と、平成12年度からコムズ相談室主催で1ヶ月に1回（託児付）グループで子育てについて話をしてきました。平成15年度には、9月から10月にかけて4回連続で「ほっと楽ルーム～子育て編～」を開催しました。“子育てをしている保護者のネットワークを広げていきたい…”そんな講座修了生の思いから、子育てほっと楽　同窓会を立ち上げることになりました。

私がおじゃましたときは、“子どもに愛を伝える方法”という本の読書会をしていました。本の内容は、子どもが望んでいる愛の伝え方を知って、子どもに無償の愛を伝えることが大切だというものです。この本の中で、5つの“愛の伝え方”が紹介されていました。

その5つとは――

言葉・スキンシップ・ともに過ごす時間・贈り物・サービス

この5つの愛の伝え方を、学ぶ前と学んだ後でどんな変化があったかの話の中で、夫に対しても自分が要求するだけでなく、夫がこうしてほしいと思っていることをまず自分からしてあげようと、話が広がっていきました。また、子どもや夫との関係だけでなく、自分自身と向き合う時間を持つことができたという話もありました。

読書会は1人づつ読んで回りますが、目と耳から入るので、本の内容がよくわかります。また、子どもと離れて2時間ほどですが、落ち着いた気もちで日頃の子どもとの関係、夫との関係を見直してみる良い機会にもなっているようです。

「少し肩の荷をおろして、ゆっくりと自分を振り返る時間になれば」とグループ代表の真鍋さん。最近子どもがわからない、親がどうあればよいかもわからない、そんな親が増えているとよく耳にします。子どもと良い関係を築くには、まず親が心豊かで余裕を持つことが大切です。だからこそ、このようなグループが必要なのでしょうね。

会が終わると、参加していたお母さん方も、リフレッシュできた明るい表情で子どもさんのところに帰っていきました。

このグループは、平成15年度の男女共同参画活動支援事業の対象として、コムズからの助成金を受けて活動してきました。助成が終わる今後も、ぜひ、活動を続けていきたいとみなさんおっしゃっています。子どもやパートナーとの関係に何か不満を抱えているお母さんお父さん、ぜひ、このグループの方々とお話してみてください。私もおかげで、なんだか優しい気持ちになれましたよ。

（リポート：森元　優子）

「子どもに愛を伝える方法」
田上時子＋エリザベス・クレアリー
築地書館
この本は、コムズ2階図書コーナーで貸出しています

Reporter's Voice

「コムズde遊ぼう」に参加して

“コムズde遊ぼう”が2月1日（日）迫力ある水軍太鼓で幕開けされました。今年で2回目となるこのイベントは、コムズ登録団体による展示や体験コーナーを通して、日頃の活動を広くみなさんに知ってもらおうと企画されているものです。

ダンスや気功の体験をされた参加者からは、「久しぶりに体を動かし楽しかった」「体中がポカポカとしていい気持ち」とはずんだ声が。環境に関する話し合いやめだかを使った洗濯実験では、「環境汚染に危機感をもった」「地道な活動に頭が下がった」などの感想が寄せられました。多言語で遊ぶコーナーでは小さい子どもさんも混じってとっても楽しそう。その他、愛らしいイヌ、ネコの写真、手の込んだ手芸品やフラワーアレンジメントの展示などに、参加者は興味深く見入っていました。私もフラワーアレンジ体験でステキな作品を作り、性格分析では知らなかった自分が見えてきたりと、有意義で楽しい一日を過ごすことができました。

参加団体の皆さん、お疲れ様でした。今年は開催の広報が遅れ参加者が少なかったという残念な意見もありましたが、それを反省点に来年はもっとたくさんの方々に楽しんでいただけるよう企画してほしいと思います。本当に楽しかったですよ。来年はぜひみなさんもご参加ください！

（リポート：森元　優子）

日本女性会議2004まつやま情報

Information　Vol.4

プレイベント終わる 10月本番に向け、手ごたえと学び

日本女性会議では第5回コムズフェスティバルを10月の本番のプレイベントとして、オープニング・セレモニー、記念講演、シンポジウム、交流会と14の分科会を企画し、運営にあたりました。また、本番での物販を想定し、チャリティーフリーマーケットを実施。2日間とも大勢の参加者でにぎわいました。

記念講演には300人を超す参加者が、また、コムズとコミセンの2ヶ所で行われた14の分科会には延べ500人近い人が参加。2日目のシンポジウムには約150名、午後からの交流会には県内の女性団体をはじめ約180名が参加し、企画・運営にあたった実行委員それぞれが確かな手ごたえを実感することができました。同時に、実際に事業を運営してみると、細部にいろいろな不具合が生じて肝を冷やしたり、時間のロスを体験したり、多くの反省点も出てきました。

実行委員会ではこれらの反省点を踏まえ、10月の本番に向けより一層の充実に取り組んでいきます。

チャリティーフリーマーケット

盛会だった交流会

●実行委員会では実行委員を募集しています。みなさんの参加をお待ちしています。

連　絡　先

日本女性会議2004まつやま実行委員会事務所
（松山市男女共同参画推進センターコムズ内）
TEL：089(943)5772　FAX：089(943)5809
e-mail　info@njkm2004.coms.or.jp

「おつかれ様でした!」

リポーターを卒業するみなさんからのメッセージ
Message from reporters

3名のコムズリポーターさんが、今回の号を最後にリポーターを卒業されます。2年間ほんとうにお疲れ様でした。そして、この体験をこれからの生活にぜひ活かし、いろんなことにチャレンジしてくださいね。

Yoko Tanaka　田中　洋子

リポーターとして活動してきたこの2年間、普段では出会えないような多くの人たちに出会い、多くの発見ができたことはとても大きな財産となりました。結構大変な作業ではありましたが、できあがったときの達成感はとても心地よいものでした。私自身のこの2年間の生活にそんなに変化はないのですが、周囲では結婚・出産・就職などちょっとした変化がありました。これからもマイペースながらも、いろいろなことに挑戦していくつもりです。コムズ関係者の皆様、読者の皆様本当にどうもありがとうございました。

Yasuko Morimoto　森元　優子

2年間、たくさんのすばらしい方々に出会い、そしてアンケートを取ったり講演に参加して内容をまとめたり、いろいろな経験ができ本当に楽しかったです。インタビューがうまくできるかと緊張したり、原稿をどんなに書こうかと迷って夜遅くまで悩んだことも、今では良い思い出です。インタビューやアンケートにご協力いただいた皆様、つたない私たちの文章を読んで感想をお寄せくださった皆様、そしてサポートしてくださった担当の方、本当にありがとうございました。終わりにあたり、この情報誌“コムズ”がさらに充実しますように期待しています。

Ikue Tomooka　友岡　郁江

2年間で、私の環境も徐々に変わりました。いろいろ悩んだ時、リポーターの仕事で素敵な人たちに出会えてパワーをいただき元気になれました。自分の感じたことを文章にするのはとても難しく毎回必死でしたが、スタッフのみなさんに助けていただきながら無事終えることができ、感謝しています。これからも人との出会いを大切にしていきたいと思います。貴重な体験をありがとうございました。

編集後記

コムズ情報誌市民リポーターとして、これまでに9人の方々が卒業されました。それぞれ得意分野を活かしながら、毎回一生懸命携わってくださいました。現在、卒業生のみなさんもいろんな場で活躍されているようです。今後も新たなメンバーで、より充実した読者に親しみやすい情報誌を発行していきます！！

（S）

この冊子は再生紙を使用しています。